

“女らしさ”と“男らしさ”的境界を越えて

ホワン・ウェイフオン

私は日本に来てもう2か月になりました。この間に、一つ面白いことに気づきました。お昼の時間で松屋に行くと、ほとんどが男性のサラリーマンです。一方で、可愛いカフェに行くと、店内のほとんどは女性とカップルしかいません。みなさん、このような性別によって違う行動の経験がありますか？正直に言うと、以前の私もそういう性別に関する印象がありました。でもそれを気づかずに、「当たり前のこと」だと思っていたのです。そして結構悩んでいました。もしできれば、これについて昔の自分に伝えたいことがあります。

幼い頃から、周りの大人は男の子と女の子に対しての期待は全く違いました。男の子はやんちゃでも、間違っても「男の子だから仕方ないね」で許される、いつでもやりたいことをできる、みんなから強い頼れる”男らしい”人になることを期待されていました。そして女の子は、優しく思いやりを持って、女らしい服を着て、みんなの期待と違う行動をすると、「そうすればお嫁に行けないよ」と言われました。子どものころはうまく言葉にできませんでしたが、「男ならできることはもっと多い」と感じていました、結局は「男のようになりたい」の思いはどんどん強くなりました。野球を始めて、男らしい服を着て、時々悪い言葉使いで話す、自分の感情と弱さを全部隠す。常に”男らしい”行動をするのは強さと信じていたのです。そしていつの間にか、「女らしいこと」すべてを嫌うようになっていました。

そんな私が変わったきっかけは、女子高校に入ってからでした。最初のうちはとてもなじめず、「女っぽい」行動を見ると嫌に感じました。ある日、体育の授業で日焼け止めを塗っている友達を見て、「そんなのダサい」と言いました。するとあの子はこう言いました。「どうしておしゃれすることがそこまで嫌いなの？私はただ、日焼けしたくないんだよ、ダサいとか関係ない。」その一言が、私の世界を変えました、私が嫌だったのは生物学的な“女性”ではなく 社会の中で女らしいと男らしいが当たり前のような価値観でした。私は初めて自分の違和感の正体を理解しました。

今の私は昔の自分に、その性別の籠に閉じ込められていた自分に伝えたいのは、この時代は性別に関わらず、誰もが自分の生き方を自由に選べる権利があると言うことです。強くてもいいし、優しくてもいいし、松屋に行ってもいいし、かわいいカフェに行ってもいい。それは「男らしく」「女らしく」ではなく、「あなたという人間」がそうであるだけです。だからこれからも、「自分らしく」生きたいと思ってください。